

# 大学の緑地管理

大学キャンパスは、広場や並木道など豊かな緑地を備えているところが多く、近隣地域をも含めて景観管理に大きな役割を果たしている。また、地域住民のキャンパス内入場を許可する大学やキャンパス内の庭園を開放するなど、市民の憩いの場としての役割も果たしており、これらは大学に対する印象形成に大きく寄与している。大学の緑地管理には、総合的な施設維持管理計画の企画・運用に基づく多くの手間や費用が必要である。全国の自治体には緑化助成補助金などの支援補助制度も存在するが、それらだけでは十分とは言えない。

こうした大学の緑地をとりまく状況を踏まえ、本小特集では、キャンパスの緑地管理・活用に取り組んでいる事例を取り上げ、キャンパスにおける緑地の位置付けやその管理、成果などをご紹介いただき、大学の緑地管理に関する現状と課題について考える機会としたい。

## 深沢キャンパスの四季

中島 隆

● 駒澤大学深沢校舎事務室課長

## SEGESを活用した緑地管理

山本 功一

● 立正大学管財部熊谷管財課課長

## 教育農場とガーデンは教育実践の舞台

命を育み、人を育てる園芸教育

澤登 早苗

● 恵泉女学園大学人間社会学部教授

## 大学キャンパスの緑地計画とマスタープラン

立命館大学の三つのキャンパスを事例として

武田 史朗

● 立命館大学理工学部教授、

学校法人立命館キャンパス計画室副室長

# 深沢キャンパスの四季

中島 隆

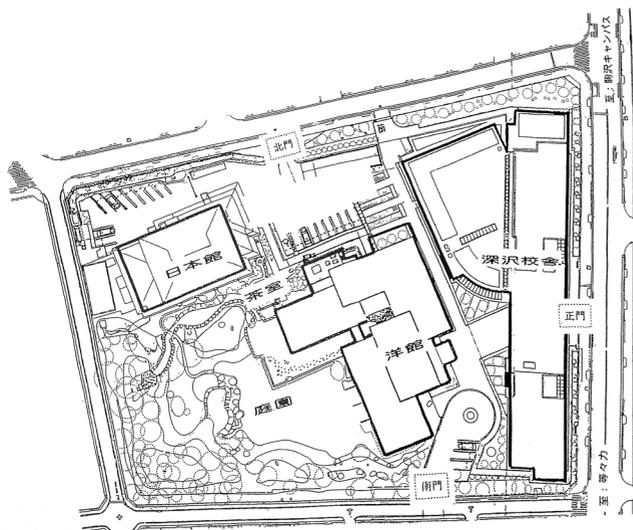
● 駒澤大学深沢校舎事務室課長

## はじめに

「三越シルバーハウス」。近隣では今でもそう呼ぶ方が多い。昔の面影を多く残しているため「駒澤大学深沢キャンパス」よりも旧名のほうがなじみ深いようだ。

## 1 現在に至る経緯

この敷地は、本学が1999年に百貨店の株式会社三越（現株式会社三越伊勢丹）から購入したものであり、敷地面積は約1万4000平方メートルを有するが、第一種低層住居地域が84%も含まれている。そこで、現存する建物（洋館・日本館・茶室）、庭園などを存続させ、地域貢献に寄与するなど、さまざまな建築条件緩和を図ることにより、東京都から現状の認可を受けて校地として使用している。



深沢キャンパス全体図

かつて、この土地は大正時代に三越が社員の福利厚生施設として開発した場所であって、体育や文化活動の拠点のクラブハウスや運動場のほか、三越駒沢体育館やプールが建設されていた。その後、1972年に三越創業300年記念事業の一環として、迎賓館としての「三越シルバーハウス」や庭園が完成し、同じく茶室が三越本店から移築された。さらに、1982年に日本館が開設されて現在の姿になったものである。

用地取得後は、建設当時の姿を残しつつ大学の施設として使用するために、洋館には耐震・改修工事を、日本館・茶室には改修工事を施した。

## 2 施設紹介

ここで、深沢キャンパス内の主な施設について触れてみたい。

### (1) 洋館（旧三越シルバーハウス）

昭和を代表する建築家であり、新興数寄屋造りの大家と評される吉田五十八の作品である。他の作品としては、外務省飯倉公館、旧歌舞伎座、日本芸術院会館、大和文華館、岸信介邸、第17世中村勘三郎邸、作家の吉屋信子邸などが挙げられる。

当時の図面は東京藝術大学 大学美術館に保管されており、依頼者が外務省飯倉公館（ゴールドハウス）を見て吉田に設計を依頼したものであって、類似点が多くみられる。作品は三越シルバーハウスの名称で発表されたが、これは飯倉公館の装飾などの金物が金色であるのに対し、銀色を基調として作られたことに由来している。大小二つの広間やロビーを有し、当時の調度品は現在もそのまま使用されている。



洋館正面玄関

### (2) 庭園

元は三越の運動場であった場所で、樹木はなかったところである。ただ、周辺は自然環境に恵まれていたところから、吉田の説明によれば「その庭園の構成において、借景を計算に入れて起伏のゆるやかな平安朝の絵巻物をおぼわせる芝生の庭園とした。この大らかなのびのびした雰囲気を持つ庭は、大宮人が蹴鞠でもしている図を思い起こさせると同時に、近代的ですらある。ゆるやかな起



築山から庭園・洋館を望む

伏の芝生の小山はまた、敷地外からの借景である樹木への視線をスムーズにしているようである」とのことである。一番外側には、ソメイヨシノをはじめとする桜。小山に沿って松、ツツジやモミジなどが植えられ、四季折々の風情が楽しめるようになってい。池も併設され、鯉が優雅に泳いでいる。静かな環境にさまざまな小鳥やカルガモ、時にはアオサギや野生化したインコまで遊びに来る。

(3) 而今庵（茶室）

1957年に三越本店6階に茶室「樹庵」として開設され、1972年に当地に移築された。その後、茶室は本学移管後の2000年に補修し、当時の松田文雄総長により「而今庵」と改名された。禅語



日本館から而今庵を望む

で「過ぎ去った時」、「この瞬間」は二度と戻ってこない、「今」この瞬間を大切に生きなければならぬという願いから命名されたものである。

(4) 日本館

1982年に純和風の日本館が開設された。当時は結婚式場や宴会場としても使われ、美しい庭園をながめながら懐石料理を賞味できる美と味覚の館であった。広い舞台が設置されている115畳の大広間は、会議の規模により3部屋に分割することが可能であり、「桜」「菖蒲」「紅葉」と名付けられ、かたわらに8畳の茶室も併設されている。



日本館正面玄関

(5) 深沢校舎

日本館を中心とした国際センター事務室があるだけであった深沢キャンパスに建設された新校舎は、2006年10月に完成し、翌年4月に使用を開始した。地上6階・地下1階の校舎は、延べ床面積約1万2300平方メートル

トルを有している。大学院の研究室・教室、大学設置の各研究所、さらに国際センターも日本館から移転し、幅広い国際交流活動を展開している。また、公開講座などの生涯学習活動を通じて、地域社会との連携協力にも力を入れている。現在、深沢校舎の施設利用は年間1000件を超えており、学内外を問わず有効利用がなされ、利用者から好評を博している。

### 3 庭園開放

特筆すべきは、庭園開放である。桜と紅葉の時期に、2週間程度ではあるが一般の方々に庭園を開放し、柔らかな芝生を踏みしめながら散策を楽しんでいただいている。告知は、大学のホームページはもちろん、近隣の公共施設、まちづくりセンター、駒沢大学駅構内の本学専用掲示板などで行っている。来園者は春・秋とも700人〜1000人を数え、深沢地域の名物催事となっている。2017年の秋から日曜・祝日も開放し、より多くの方々に鑑賞していただいている。

### 4 駒澤大学深沢キャンパスを管理するについて

管理について、悩みがないわけではない。庭園や樹木の維持管理だけではなく、池の衛生管理などの特殊な業務が発生する。ビル管理会社と定期的に打ち合わせを行うつつ、管理業務を遂行しなければならない。

地域にとつては後発の建築物である校舎や改修後のキャンパスになじんでいただくため、近隣への配慮も忘れてはならない。ビル風や日照問題、落葉対策などは、説明会を重ねてご理解いただいているものの、キャンパスを管理する側としては、これまで以上に地域連携を図らなければならず、不快感を与えないことに注力している。

庭園をはじめ、洋館、日本館や茶室の維持保全は重要である。吉田茂邸の焼失、歌舞伎座の解体などによつて吉田五十八の作品が徐々に数を減らしている今日、洋館はますます貴重な建物の一つになるであろう。

閑静な住宅地に囲まれた大学として、地域の理解や協力なくして、より良い教育環境を維持していくことは不可能だと考えている。この駒澤大学深沢キャンパスが、今後とも地域との懸け橋となるよう、この校地を維持管理していく所存である。

# SEGESを活用した緑地管理

山本 功一

●立正大学管財部熊谷管財課課長

## はじめに

立正大学熊谷キャンパスが公益財団法人都市緑化機構（以下、都市緑化機構）の社会・環境貢献緑地評価システム（SEGES: Social and Environmental Green Evaluation System）の認定を取得するに至った背景・経緯、活動を報告するとともに、これをどのように活用してきたか、ご紹介したい。

## 1 背景『緑のキャンパス』

立正大学熊谷キャンパスは、埼玉県熊谷市郊外の豊かな自然環境を生かしたキャンパスづくりを目的としたため、建物の配置や競技施設などのレイアウトに配慮し、多くの樹木をそのままの形で残している。約35万平方メートルの広大な敷地を有し、そのうち約12万平方メートル

の緑地面積を維持していて、近隣には森林が多く、キャンパス全体が埼玉県鳥獣保護区の一部に指定されていたこともあり、樹木維持管理については長期にわたって緑地帯の下刈りと植栽剪定に追われてきた。この広大な緑地の植栽管理の費用増加をいかに抑えるかが課題であり、構内全体の樹木を全て均等に管理することは困難となっていた。

植栽維持管理費の内訳は、人件費（作業費・機材費）と処分費に大別できる。構内で焼却などを行っていたが、法規制によって構内処理ができなくなり、処分費が年々増加する傾向にあったため、手始めとして処分費の削減から始めた。伐採した樹木を構内の柵や土留めなどに利用し、簡易的な集積場所を構内に定め、雑草や落葉などを分別して学内処理を推進し、処分費を削減はしたものの、そのレベルに止まっていた。



## 2 熊谷再開発計画とSEGES認定の位置付け

熊谷キャンパスは、学生の教育環境を整備するために、施設の老朽化対策と耐震工事、設備の改善などが必要とされていた。そのため、開設当初からのコンセプトである「緑のキャンパス」と「自然との共生」をより強くイメージできる計画を検討した結果、先進的キャンパスを創造する五つのコンセプトとして①学び（新たな知を育むキャンパス）②環境（エコ・キャンパス）③健康（スポーツ&ヘルスフル・キャンパス）④憩い（アメニティ・キャンパス）⑤社会（開かれたキャンパス）を掲げた。再開発計画では、開発を行う「アクティブゾーン」と豊かな自然を残す「キャンパスフォレスト」を、水景池を境に明確に分け、「自然」と「ひと」と「建築」が美しく融合した風景を描いた。

熊谷キャンパス再開発計画が進む中、2008年に、都市緑化機構によるSEGES「緑の認定」を大学として初めて受けた。大学の方針として「緑のキャンパス」を守る姿勢を内外に強くアピールすることがイメージアップにつながり、未だ、どの大学も受けていない「緑の認





キングやウッドデッキを利用し、人工的ではあるが自然を感じられる暖色系で温もりのある素材を使った広場を数多く設けた。設計の段階から、記念樹や現存する植栽を活用し、新たな植栽を選定する際には武蔵野の景観や生態系を崩さないように配慮した。また、高木・低木の外に地被類を多用、樹木の生長に伴う管理作業を低減するようにし、屋外通路にはプランターやバスケットなどを置き、長い期間、

少ない手間で花を楽しむことができ、植栽を選定・配置した。このように、緑の印象を強く打ち出しつつ、作業労力を削減する効果的な演出を行ったのである。全体の管理方法としては、植栽・樹木年間作業計画表を作成し、これ

に基づいて構内清掃員が作業を行い、成果などを聴き取り調査して作業の効率化を図った。なお、計画表の変更は、そのつど行った。構内を

細かくエリア分けし、学生の利用頻度や学内行事に合わせた植栽維持管理を行うことにより、無駄な作業時間を削減し、ブローアー（庭専用の強力な電機掃除機）作業を取り入れて作業時間を短縮した。このように軽微な清掃を基本とする植栽維持管理に移行したことにより、いままで専門業者に委託していた業務を、構内清掃員の作業範囲に取り込むことができ、結果的に植栽維持管理の経費削減が可能となった。一方、台風前の枯木伐採など、危険を伴う作業は従来どおり専門業者に委託し、キャ





ンパスの安全・安心が損なわれないように配慮した。

「キャンパスフォレスト」

は緑の保全エリアとして景観を楽しむ憩いの空間を造った。

再開発計画を通して新設した修景池にはカエルやタニシ、カワエビなどが生息し、水辺を求めてカモやサギなど

が多く飛来する憩いの空間を演出した。このエリアは武蔵野の原風景の保存を狙いとしているため、植栽維持管理も必要以上に人の手を加えずに行う方針とした。具体的には、遊歩道の安全巡視（枯木の落下防止など）や枯葉の回収などにとどめている。

#### 4 SEEGES認定「維持・更新」の効果（緑の活用術）

毎年行われるSEEGES認定は、更新審査時の現地調

査など、アドバイザー（専門家）が本学の緑の活用術の「強み・弱み」をポイントごとに分かりやすく、また丁寧に解説してくれるため、活用術を向上させる手段となっている。

SEEGESでは、緑化の効果や価値などの「見える化」をより鮮明にするために、大学が行っている活動をいかに社会貢献につなげるかを助言しており、学内で収集した情報の活用について、本学が詳細に把握する契機ともなったのである。

例えば、「キャンパスフォレスト」の活用術としては、開設当初から熊谷キャンパスの緑を研究教材としてさまざまな研究が行われていたが、1998年に地球環境科学部（環境システム学科・地理学科）が開設され、施設と研究資材が身近にある最適な教育環境となった。このような環境のもとで、環境システム学科ではフィールドワークとして野鳥観測や野生動物（野うさぎ、たぬき）の生態観測を、地理学科ではキャンパス内の地形の高低差を利用して測量実習を実施している。また、学部との連携もスムーズになり、「キャンパスフォレスト」の緑地内での研究活動について学生の要望を受け入れ、研究に支障のない管理ができるようになった。

さらに、「アクティブゾーン」の活用としては、熊谷市の

要望もあって、社会福祉学部が地域連携に関して子育て支援センターを開設。子どもとのふれあいや情操教育の一環として、親子が芝生で遊び、ほかの家族とのコミュニケーションを円滑に行っている光景に緑の景観が一翼を担い、見る者の心にゆとりをもたらしている。さらに、社会福祉学部の学生がサポートをする姿は頼もしく感じる。再開発計画によって造られた散策路を利用した、自然散策（どんぐり拾い・コナラ）なども行っている。

そのほかに、埼玉県で奨励されている「子ども大学」がある。地域の小学4～6年生を対象に、高等教育施設を利用した学習経験をさせる試みとして、市町村との産学官連携体制で、2010年度から熊谷キャンパスの緑を活用している。

## 5 その他の効果

昨今は情報化の時代であり、検索機能の向上により、キーワードを入力するだけで簡単に情報が入手できる。「SEGES」「そだてる緑」などのキーワードで検索すれば本学のホームページにたどりつくことができるため、本学の活動をより多くの方々に伝えるために十分に役立

つ取り組みである。

## 6 今後の展望

緑の資産と知の財産を生かして社会・地域の方々に貢献していくことが、大学として望まれる姿であり、大学を活性化させる。この試みがより強い本学のストロングポイントとなり、「緑のキャンパス」から「緑を生かし、そだてるキャンパス」へ成長する姿を内外へアピールできるものと信じている。

## おわりに

SEGESで最高位を取得できたのは、緑地維持管理にとどまらずに認定レベルの更新を重ね、都市緑化機構と本学とが長期にわたって緑の生み出す効果を検討してきた成果であり、今後も継続したいと考えている。

熊谷キャンパス開設50周年を迎える節目の年にこのような原稿依頼をいただき、熊谷キャンパスの歴史を振り返ることができたことに感謝する次第である。



# 教育農場とガーデンは教育実践の舞台——命を育み、人を育てる園芸教育——

澤登 早苗 ● 恵泉女学園大学人間社会学部教授

## はじめに

恵泉女学園大学は、東京都多摩市の緑豊かな多摩丘陵の一角にある。園芸を教育の礎の一つとし、1988年の大学開設当初から「生活園芸Ⅰ」を全学必修の実習科目とし、野菜や花を育てることを通じた人間教育・教養教育が行なわれている。教育農場では1994年から化学肥料や農薬を使用しない有機農業が実践されていて、2001年には教育機関初の有機JAS認定を取得した。

キャンパスには、ボーダー、ウッドランドガーデン、コミュニティ花壇、ハーブガーデン、ロックガーデン、シェードガーデン、キッチンガーデン、三日月花壇、Keisen Wild Rose Garden（野ばらの庭）など、さまざまな花壇がある。1986年に開設されたキャンパスの植栽は、長野県蓼科にある付属施設「恵泉蓼科ガーデン」

の経験を生かして、恵泉園芸センター・六本木フラワーショップ次長（当時）の故・百瀬和子氏が構想した。ユキヤナギ、ヤエザクラ、ヤマボウシなど次々と咲く花木、新緑や黄葉が美しいケヤキやカツラ、それらの根元に咲くクリスマスローズやスズラン、赤い実のなるヒメリンゴ、サンザシなど、季節の移ろいを身近に感じることができる。

## 1 共生・循環・多様性を体感できる教育農場

キャンパスから歩いて5分、周囲を畑と雑木林に囲まれた教育農場は、町田市小野路に位置し、多摩丘陵の中でも特に緑が豊かな北部丘陵の中にある。総面積は約70アール、栽培される野菜と花の種類は年間50品目以上、周辺部にはブルーベリー、カキ、アーモンド、アンズなどの果樹やハーブ類も植栽されている。農場では、作物



春の教育農場と雑木林

が植わっていない通路や周辺部分も含めて化学肥料や農薬類は一切使用せず、周辺の自然環境との調和と共生、地域資源の循環と利活用を考慮した地域密着型の有機農業が実践されている。家畜福祉・アニマルウェルフェアの考え方を取り入れている八王子の磯沼ミルクファームの牛糞堆肥や山梨の黒富士農場の発酵鶏糞、お米屋さんから出る米ぬかなどを投入し、地元の植木屋さんから出る剪定枝・刈草や、管理不足が問題となっている地元竹林の竹を砕いた竹チップは、雑草管理や泥跳ね防止、乾燥防止のために活用する。冬、焚火をして作る草木灰もなくてはならない肥料である。

教育農場では共生、循環、多様性を基本とした、環境にも人にもやさしい農業を実践し

ている。土を育て、適地適作、適期適作で多種多様な物を栽培し、輪作、混植などを長年続けてきた結果、病害虫が発生しにくく、健康な作物が安定的に育つ環境が育まれている。

土中生物への影響や表土流亡を考慮して、トラクターなどの機械で土を耕すことも最低限にしている。雑草は天敵を含む多様な生き物の棲みかとなり、生物多様性に寄与し、還元されれば農場内循環の一部を担う大切な資源となるからである。雑草防除ではなく、作物栽培や景観上の問題が生じないように管理する。夏休み期間中の雑草管理にも工夫を凝らした結果、省力化を可能とした。

授業や各活動で使用する場所は明確に区分し、管理責任はそれぞれの活動に委ねているため、管理上一番の課題は、授業がなく、植物の成長が旺盛な夏休み期間中の雑草管理である。しかし、これもまた、夏前に収穫を終えた畑や通路に刈草や竹チップを厚く敷くことによって雑草の成長を抑制し、適切に管理できることを実践から見いだした。こうして、夏休み期間中に実習がなくても、畑に来なくても、大きな問題が生じなくなった。一方、夏休み期間中に除草の必要がある周辺部分は、10年程前から外部委託に切り替えた。以前は教職員が夏休みに出

勤して行っていたが、人員削減や他の業務との兼ね合いなどから負担が大きくなった。外部委託の場合、費用面や希望時期に除草ができないといった不都合も想定されるが、近隣の造園業者に委託しているためか、今のところ問題は無い。

キャンパス内や農場周辺道路の落ち葉は、腐葉土や踏み込み温床として活用している。落ち葉は、自分たちで集めて活用するのは簡単だが、他の部署が集めたものを活用するには連携が不可欠で、ゴミが混入しないように注意を促す必要がある。軌道に乗るまで少々時間を要したが、大学にとっては、産業廃棄物の削減に伴う二酸化炭素排出量の削減と内部資源の循環により、環境負荷の低減に役立っている。

学生数の減少に伴い、授業で使用する面積が減少したために、近年は、次のような授業以外の教育・研究活動にも農場が用いられている。

・ 恵泉やさい園芸スタッフの指導の下、学生が自発的に野菜などを栽培し、販売まで行う実践的な学び。

・ 恵泉CSA・有機農業を通じて「地域を支える」「地域が支える」「地域とつながる」ことによって人と人の関係を紡ぎ直すコミュニティ菜園の普及を目指す活動。

栽培した作物を定期的に会員に有償頒布し、起業を目指す。学生・教職員・卒業生、公開講座の修了生によって、社会実験として2016年に開始。

・ 福島キッズキャンプ@恵泉・2013年から、

福島の子どもを大学に招き、2泊3日の日程で開催している。キャンプの収穫体験用野菜の栽培は、園芸スタッフの指導の下、学生が主体的に栽培。

専従スタッフがいない本学教育農場は、教育・研究の実践の場として活用していく中で維持管理されてきた。

農業・化学肥料を使用せず、耕さず、雑草を活用する営みを続けてきた結果、教育農場は作物栽培のためだけでなく、キジ、モズ、カエル、ヘビ、クモ、ミミズなど、



晩秋の教育農場



雨の中のオープンガーデン、  
手前は「タネから育てる花壇づくり」の実習花壇

たくさんの小さな仲間の棲みかとなり、多様な命を育むサンクチュアリ、生物多様性保全の場としても機能している。

## 2 タネから育てるキャンパスの花壇

キャンパスには多種多様な花壇があり、植栽・管理は、「花壇ボランティア論」「生活園芸Ⅱ」「ゼミ科目」などの授業、公開講座「タネから育てる花壇づくり」「デザイン

して作るコミュニティ花壇」のほか、園芸教育課外活動「キャンパスのガーデンになろう」でも行われている。

花壇には年間200種類以上の草花が植えられ、その半数以上はタネから育

てたものである。大半の花壇では、農薬や化学肥料は使用せず、教育農場と同じ牛糞堆肥、発酵鶏糞、竹チップを使用している。

花壇づくりは「タネから育てる」を基本とし、一年草はそのほとんどをキャンパス内のガラス室で播種、移植し、育苗したものを植えている。学生は小さな苗が花壇に定植され、少しずつ成長して花が咲く過程を、手入れをしながら観察することができる。これにより、花壇は観賞目的だけでなく、日々の変化を観察できる貴重な生きた教材となっている。本学が独自に始めた「恵泉草花検定」は、花壇に植えてある身近な草花の名前を答えるものであるが、本学の花壇はそのための学びの場ともなっている。

2005年春から毎年、公開講座「タネから育てる花壇づくり」の実習花壇としていいる花壇には、低木のアジサイ、アナベルや宿根草のキバナノコギリソウ、シオンなどが植えられているが、年に2回、講座でタネから育てた一年草の苗を植えて花壇を作っている。月に2回の講座の時間内に、タネから花壇用の苗を育てて手入れをする。

### 3 宿根草を生かした花壇づくり

環境負荷が低く、省力管理が可能な花壇づくりには、10年ほど前から取り組んでいる。ガーデニングブームのなか、各地でフラワーフェスティバルが開催され、新しく花壇が作られたが、フェスティバルが終わり、花壇で植え替えが行われるたびに、大量のごみ（有機性廃棄物）が出る現状に疑問を持ったからである。その後、一般市民から大学の園芸教育室に、市などから無料支給されていた一年草の花苗が経費削減の影響で支給されなくなった、少ない経費や労力で美しい花壇をつくることは出来ないかという問い合わせも寄せられた。これらを機に、学内の研究助成を利用してプロジェクトをスタートさせ、試行錯誤を繰り返してきた。

その結果、宿根草を生かしながら多摩丘陵の環境に合わせた庭づくりをすれば「日本の四季を感じるナチュラルな庭」「人と生き物のための庭」が実現可能であること、省力化も図れることが明らかになった。この成果が生かされた結果、花の有機栽培は難しいという既成概念を乗り越えて、キャンパスに点在する多くの花壇では有機栽培への切り替えが進んだ。その背景には、プロのガー

デナーとして活躍する卒業生が、本学の非常勤講師や公開講座の担当者として、また「キャンパスのガーデナーになるう」の指導者として深く関わっているということがある。

### 4 Keisen Wild Rose Garden ～野村の庭～

学内には、学園創立80周年記念事業「花と平和のミュージアム」の一環として同窓生と学園が協働で開設したバラ園がある。同窓生でバラ研究家の野村和子氏の設計・監修によるもので、野生種のバラを北半球の4地域に分けて植栽し、化学肥料や農薬を使用しない有機栽培で育てている。華やかなモダンローズの



Keisen Wild Rose Garden  
中国の野生種コーナーで（5月）

バラ園とは趣が異なるが、一重の小さな花や実を楽しみながら、バラの歴史に思いを馳せることのできる、類まれな特別なガーデンである。野村氏と同窓生、同氏が講師を務める公開講座の受講生、本学学生、教職員が一緒に、ゼロから作った手作りのバラ園でもある。

バラを育てる人と観賞する人の健康、生物多様性など、身近なところから地球環境問題に配慮し、化学肥料や農薬を使用しないバラ栽培を行い、将来的にはその方法を地域社会に提案することを視野に入れ、人と植物の自然史／文化の関わりを理解する学習フィールドとする。遺伝資源として野生種のバラを保全する。これらを基本コンセプトに、野生種のバラ栽培を通じて自然の営みに着目し、自然との共存、持続可能な生き方を探るためのフィールドミュージアム「未来のバラ園」を目指している。

## おわりに

人文系大学にも関わらず、園芸関連の授業や公開講座が行われている本学にとつて、教育農場やガーデンは重要な教育実践の舞台である。その維持管理は教育活動の一環としてカリキュラムに組み込まれ、ここでは栽培技

術の習得にとどまらず、環境負荷の低減や生物多様性の保全など、今日的な課題の解決に目を向けた取り組みが行われている。

教育農場や花壇を管理する専従職員はおらず、芝刈りや樹木の剪定は外部に委託している。花壇や教育農場、バラ園はオープンガーデン（年に3回程度）や教育農場ツアー（5月のスプリングフェスティバルと11月の恵泉祭）などによって一般公開され、地域に開かれている。

限られた資源や環境の中で維持管理を行うことは困難を伴うこともあるが、環境負荷の低減や省力栽培、ボランティアの活用など、その体験が地域の園芸活動の支援に役立つこともある。経費や人員の削減、高齢化の波が押し寄せ、周辺地域でも緑地管理が年々難しくなっている。そのような中で、本学は、野菜や花を自ら育てることによって人が育ち、人がつながり、コミュニティが再構築されるといふ園芸が有する新しい可能性と効用を発信し、その普及に努めている。



# 大学キャンパスの緑地計画とマスタープラン —立命館大学の三つのキャンパスを事例として—

武田 史朗 ●立命館大学理工学部教授、学校法人立命館キャンパス計画室副室長

## はじめに

筆者が所属する学校法人立命館のキャンパス計画室は、より一貫性と計画性の高いキャンパス整備が行われるために2011年に設置された教職連携による全学的機関である。本稿では、キャンパス計画室が他の所轄部署と連携して取り組んだ計画事例のうち、特に緑地に関する例を紹介し、大学キャンパスの緑地の計画と管理について、重要と考えられる点をいくつか確認したい。

立命館大学では、2015年に開設した大阪いばらきキャンパス（以下、OIC）の計画と並行して、既存の衣笠キャンパスとびわこ・くさつキャンパス（以下、BK）のマスタープランを検討し、2015年春にその「version 1.0」をまとめた。以下では、前記三つのキャン

パスにおける緑地整備計画を紹介する。

なお、何を「緑地」と呼ぶかについては、個別の空間における緑化の有無や量をその絶対的な基準とするのではなく、都市空間の議論において「ランドスケープ」と呼ぶような広い対象を含み、その中の欠くことのできな要素として緑化空間がある、という理解に基づいて、本報告を行いたい。

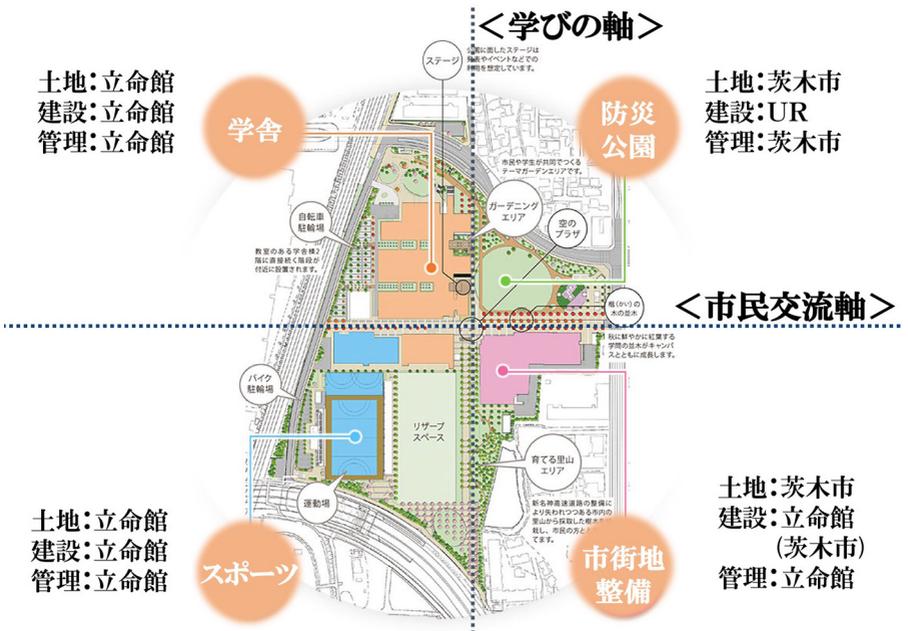
## 1 都市緑地の一部としての大学キャンパス

キャンパスのランドスケープは、キャンパス内の空間における機能的、経験的価値を向上させるものであると同時に、キャンパスを含む市街地においても重要な役割を果たし得る資源である。国公立大学のキャンパスには歴史的な緑地ストックを擁するものも多く、その都市内

緑地としての価値は明らかであるが、私立大学のキャンパスでも、規模の差こそあれ、この価値は大きく減じられるものではないと筆者は考える。キャンパス内の緑地計画を行う際には都市的な文脈を把握した上で、既存の緑地や空地のネットワークへの接続などを含め、周辺地域と協調して価値を高め合うような計画が望ましい。

立命館のキャンパス計画で、こうしたことを強く意識するきっかけとなったのが、OICの計画だった。JR茨木駅から徒歩5分に位置するサッポロビール工場跡地が計画敷地であった。約8・5ヘクタールの大学キャンパスと、1・5ヘクタールの茨木市の管理する防災公園（岩倉公園）、さらに市が大学に貸与する1・5ヘクタールの敷地に、大学が市の補助を得て建設した市民開放型施設（図書館、ホール、レストランなどを含む）が一体的に、同時進行で計画・整備された（図表1）。

防災公園市街地施設整備事業という国の補助事業を活用したこの計画では、周辺市街地との連続性を中心課題として検討し、塀のないキャンパス、公園と一体化したキャンパスという方針が当初から位置付けられた。周辺の既成市街地の街路構造や緑地資源との連続性などを意識した計画とデザインが、茨木市、都市再生機構（U



図表1

R)、立命館および関係の専門機関との密な協議を通して進められた。その結果、大学のキャンパスと公園との境界が見つけにくいほど一体化した姿が実現した(図表2)。

このように、所有と管理の主体が異なるオープンスペースを一体的に計画、デザインし、都市内の連続する緑地

ネットワークを構築する先行的事例は、歴史的には数多くある。エメラルドネットワークと愛称される米国ボストンの緑地系統にはハーバード大学の樹木園の土地が含まれているし、神奈川県横浜北ニュータウンにおける緑地系統「グリーンマトリックス」には、学校などの公共施設の管理地だけでなく、民間の住宅開発や社寺仏閣が所有管理する緑地が取り込まれている。

都市の公共空間の管理運営に民間活力が導入される事例も急増するなか、今後の大学キャンパスにおいて、その中のオープンスペースの公共的価値を十分に意識した計画と管理は、公益性の高い大学法人として、次世代に

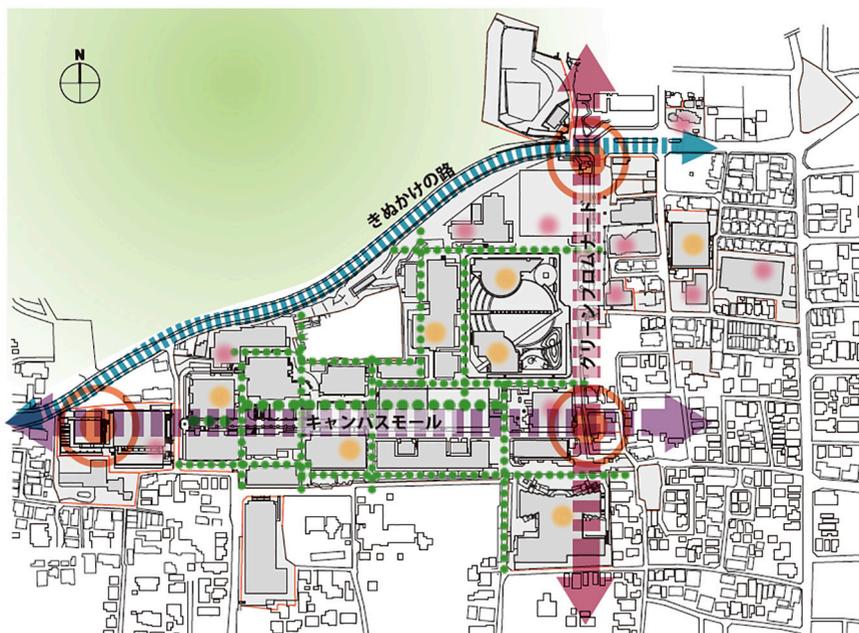


図表2

向けた責務の一つであると考ええる。同時に、それが大学にとってメリットとなる好循環を目指すことが重要である。これには、単なる大学のブランドイメージ以上の意味があると考える。昨今の流行であるイノベーションも、そこに集いたくなるような優れた環境に、優れた人材が居合わせ、また別の時に、その美しい風景を互いに思い出しながら、その共通体験を信頼の基盤として言葉を交わすことから始まるものではないだろうか。そのような風景が、大学だけでなく地域との協働によってキャンパス内外に育まれるのが、大学のある町の理想の姿でもあろう。

## 2 キャンパスの骨格としてのオープンスペース

大学キャンパスは大学の施設であることが本分である。周辺市街地と連携しつつも、キャンパスの景観自体が、学生の記憶に残るアイデンティティに満ちたものであって欲しい。ただ実際には、長年にわたって利用されてきたキャンパスほど、歴史的に積み重ねられた建設計画によって狭隘化が進み、緑地や空地は断片的な「残余」の空間となりやすい。その結果、キャンパスの全体像が把握困難になっていることも多い。



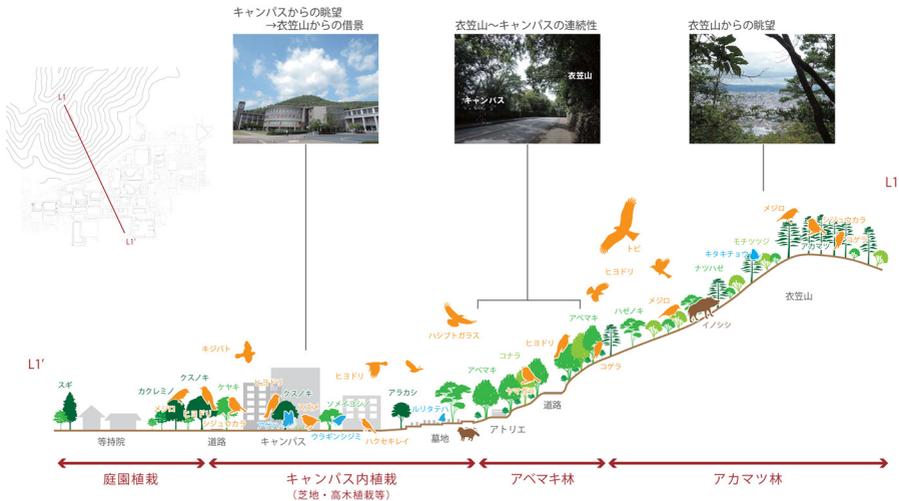
図表3

立命館大学の場合には、衣笠キャンパスがその典型的な例であり、OICの開設も、このキャンパスの狭隘化の解消が大きな目的の一つだった。そこで、衣笠キャンパスのマスタープランでは、近隣にある大徳寺や妙心寺の境内をモデルとする将来像を提示した。多くの塔頭が集合しながら、周辺市街地とも互いに浸透しあう通りを持つ境内のような路の空間をキャンパスの基本構造とし、その一部に、正門からキャンパス中心部へと導く並木道となる「グリーンプロムナード」と、「キャンパスモール」と称する大規模なオープンスペースを中心軸として設ける将来像を描いた（図表3）。

当然、このような計画はすぐには実現できない。そこで、キャンパスモールに該当する範囲の建物を建て替えるタイミングで、その部分を恒久的な緑地空間として整備していくという方法を採用している。図表4は、この計



図表4



図表5  
(作成：株式会社ラーゴ)

画に従って、新図書館の建設に伴って解体された旧図書館の跡地を、2016年に整備した広場である。

また衣笠キャンパスは、金閣寺や龍安寺といった古刹を擁する衣笠山の麓にある。歴史的な緑の環境を、キャンパスを媒介にして、いかに市街地へつなげるかが、今後の重要な課題である。

衣笠キャンパス自体が風致地区内にあるため、建設実務的にも、キャンパス計画に緑化およびランドスケープの計画を重要な要素として取り込むことが重要になっている。本学のキャンパス計画では、これを単なる人工的な建築景観のコントロールだけでなく、衣笠山など自然的景観を含め、地域規模のランドスケープ計画の一部を担うものと捉えている。現在、衣笠山とキャンパス内の植生調査を実施しており(図表5)、今後キャンパス周辺を含めた文化的、生態学的に有意義な緑地環境の保全と創出のための計画を検討したいと考えている。

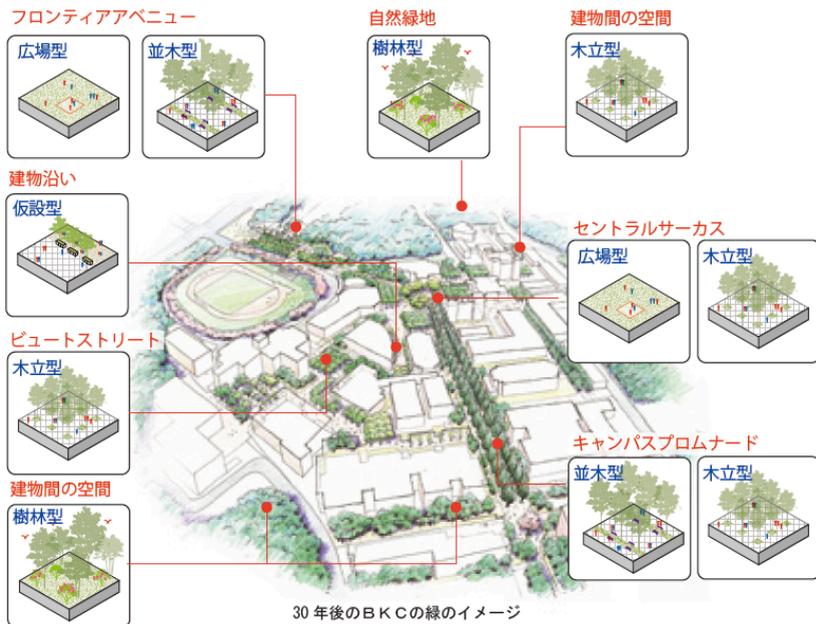
一方、密集した市街地におけるキャンパスおよびその周辺にとって、緑地はアメニティや保護の対象だけではなく、街並み空間の重要な要素の一つでもある。衣笠キャンパスでは、周辺を閑静な住宅地に囲まれながら、徐々に利用する土地を拡大して来た経緯から、当初の敷地境

界を超え、住宅地に交じり合っただけで新たな建物がいくつかに建設されてきた。そこで、キャンパスの飛び地に計画された大学院施設「究論館」では、建築系学生の提案によって、地域住民が自由に通り抜けできる緑化された通路を確保した。門扉の外側にも高木の植栽を施した広場状の空地を設け、市民の生活空間の一部としている。

### 3 キャンパスの長期的な緑地計画

緑地整備は短期間で効果が現れるものばかりではない。特に新しいキャンパスや植栽基盤が貧弱なキャンパスなどでは、土壌や地下排水整備、適切な樹種選定などを含めた計画が必要となる。こうした緑化工事は思いのほか高額になるので、実施には明確な骨格ヴィジョンと段階的計画が必要である。

本章で紹介するBKCは、まさにこうしたケースである。このキャンパスは1993年に里山の谷地を切り開いて建設された。広範な建設用の地盤改良を行ったことと、「古琵琶湖層」と呼ばれる古い粘土質の土壌のために、キャンパスのほとんどは透水性が極めて低い土壌である。そのため、開設当初に植えた樹木の多くは発育不良の状態にあった。



30年後のBKCの緑のイメージ

図表6

こうした事情もあり、キャンパスの周囲を既存の樹林に囲まれながら、キャンパス中心部の緑は豊かとは言い難い状況であった。こうした状況に鑑みて、BKCマスタープラン2015ではキャンパスの骨格的な空間軸の部分と、それらが交差する中心部を、緑化に関して高い優先順位をもつエリアとして定めた。2020年度までの中長目標として、各エリアに対して、望ましい緑地整備のおおまかな方針とその段階的な整備計画を、土壌や排水性の改善策とともに示した(図表6)。

このマスタープランの策定段階以来、BKCでは企画担当常務理事がグループ長を務める全学的会議体「BKC緑地計画具体化ワーキンググループ」を設置し、学生のヒアリングやワークショップを企画・実施しながら、関係部署が幅広く参加して計画を検討している。次章で紹介する二つの事例も、こうした場での議論を反映して計画されたものである。

#### 4 キャンパスライフの質が向上する緑地

図表7は、マスタープランに基づきBKCで実施された「フロントティア・アベニュー」の緑地整備(2016年)である。同時に建設されたカフェ併設の「スポーツ

健康コモンズ」という、誰もが利用できる体育施設と併せ、「キャンパスの顔」を再生する計画として検討した。

このエリアは、もともと軸線のスツキリ通った並木道が正門からの美しい眺めをつくっていた一方で、夏場は照り返しが強く、楽しんで歩くには向かない環境であった。そこで、改修計画では通路を雁行させて大きな芝生面を新設し、軸線上の照り返しを大きく低減した。新たに植えた並木には、逆箒型の樹形を持つエノキを採用し、木陰を増やした。加えて地中に暗渠排水管を設置



図表7



図表8



図表9

し、排水性を向上させた。並木が健康に育つことで、正門からの長い歩行経路沿いに多くの緑陰をつくり出し、芝生広場と共にキャンパスの顔として育っていくはずである。

すでに、この緑地を眺めるカフェには多くの学生が集い、目の前の緑を背景として、行き交う人々を眺めながらレポートを書いたり憩いの場としたりしている。芝生では、運動施設を管理する民間事業者の協力で、地域住民も参加するヨガ教室などが開催されている(図表8)。

BKCでは現在、もう一つの骨格軸「キャンパスプロムナード」と、骨格軸の交わる中心部「セントラルサーカス」の緑地整備の具体化について検討している。

フロンティア・アベニューの場合と比べると、これらのエリアは歩行者が輻輳し、まとまった緑地の配置が難しい。そこで、現在はベンチの

配置を変える実験を行ったり、学生ワークショップ(図表9)によって利用者の意見を集めたりして、望ましい緑地の配置や居場所のつくり方を検討している。実験では、異なるベンチの配置によって生じる歩行者密度の偏りや滞留の頻度、滞留中の行動の種類の変化が観察されている。このような調査からキャンパスの屋外空間が満たすべき要件を明確化し、既存の樹木を生かしながら緑量を増加する計画を検討している。

## おわりに

以上、立命館大学の三つのキャンパスにおける事例を紹介しながら、大学キャンパスの緑地計画において重要と考えられる点に触れた。もちろん、いずれの計画も理想的なわけではなく、特に現在進行形で書いているところは、直面する課題の再認識を兼ねた、達成に向けて努力すべき方向性の自己確認である。自戒として記述した側面もあるので、計画が進行するなかで反省を含め、改めて報告する機会を得たい。ご批判をお待ちするとともに、大学キャンパスの緑地管理に関する議論の題材を少しでも提供できれば幸いである。

